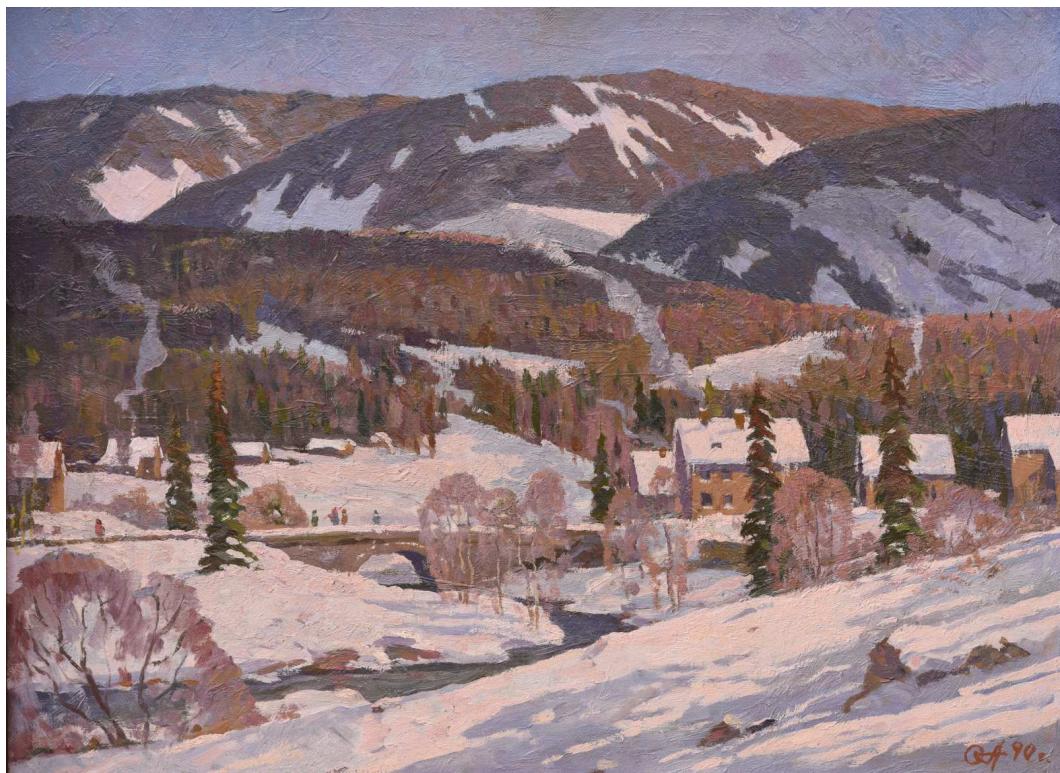


飛躍した画家

モスクワに生活し、趣味として画廊巡りをするようになって三年ばかりの間に、画廊に定期出展していた画家のうち、その画風が気に入って注目するようになった画家が両手で数えるほどの数になった。その中で比較的若く、ある時期を境に力量が大きく伸びたのを見届けることの出来た画家が二人いるので、ここではその二人の作品を紹介することにしたい。

一人はO・A・アヴァキミヤーンといい、その画家が私の身近な存在になったのは九一年春にアパートの近くのレーニン通りの画廊で初めて手に入れた彼の作品がきっかけであった。



図版 25 O. A. アヴァキミヤーン(1949年生まれ)
「山の冬」(制作 1990 年) 油彩・画布 60 x 80 cm

「山の冬」(図版 25)と題されたその作品は、保養所のある山の背後にさらに三つの高い山を配し、その頂の上に明るい青空を覗かせた大きな構図の冬山の絵であるが、事務所に勤めていた最初の秘書によれば、それはアルメニアの山の冬景色を描いたものであるという。彼女の亡くなった旦那さんがアルメニア人で、よくアルメニアの冬はピンク色である

と言っていたという。ある時この絵を彼女に見せる機会があつて、見るなり彼女はそう決めてしまった。画家の苗字からいってもアルメニア人であり、彼女の言う通りなのかもしれない。そうすると山は小カフカス山脈ということになるが、それはさておき、この絵に描かれた山の雄大な、どっしりとした実在感は大変なものである。橋の上に小さく描かれたスキーパーの存在は保養所で冬の休暇を楽しむ人々の風俗を表現しているが、同時にこの山の雄大なスケール感を強める役割を担つておき、その雄大なスケールの前に余計にぽつりと小さく見える。画面右方向から照らす陽光はこの絵の景色を光の陰影に富んだ美しいものに仕上げ、その陽光の下で山肌や木々の茶系の色調と雪のピンクを帶びた白の色合いが絶妙な柔らかいハーモニーを創り出して、この絵の雄大な美しさに穏やかな静けさを添えている。

自然光の中で距離を取つてこの絵を見ると、空の青さに深みが出て、山頂の山肌を照らす日は光の質感が増し、日の当たる山肌と影になったそれとの陰影の対比がより鮮明になる。また、空気はより澄み渡つて、絵全体が生き生きと甦つたようになる。画家がこの絵に描かれている保養所に滞在して描いたものであり、優れた出来映えの作品になっている。

居間の壁にかけて毎日見るうちに、ますますこの絵が気に入り、自ずとその画家に興味を惹かれるようになったが、現在も最新版となつたままの八八年四月一日付け編纂の「ソ連芸術家同盟会員名簿」に彼の名は見当たらない。後から考えると、「山の冬」が芸術家同盟会員にのみ開放されていた画廊で展示販売されていたので、彼はその編纂日以降に会員になったものと想われる。その名簿には彼の父親が画家として名を連ねている。ロシアによく見られる親子二代にわたる画家の血筋ということになるが、彼の画才もそんな家庭環境で育まれたのであろう。

後にモスクワの古本屋で「祖国を描く若い画家たち」という題名の八五年発行のアルバムを手に入れたが、そこに彼の作品が紹介されていて、そこから彼が一九四九年生まれであり、ロストフの M・B・グレコフ美術学校で絵画を学んだこと等を知ることが出来た。つまり、「山の冬」は画家の四十一歳の時の作品ということになるが、その年齢は層が厚く長老の多いロシア画壇にあっては、一角の画家として認められる上で、まだこれから多くの活躍が期待される若い画家の部類と見なすことが出来よう。

次の「イエレーツの冬」(図版 26)という作品も九一年末かその翌春に同じ画廊で見付けて、気に入って手に入れたものである。イエレーツは地図で見るとモスクワの南約四百キロのドン河支流のサスナ川の川畔にあり、ロシアでは中規模程度の都市のようである。この絵に描かれた街は恐らくその中でも古くから栄えていた居住区を描写したものであろう。教会を絵の中心に据えて描いた街並みは教会に向かって上り勾配の坂になっており、道の片側には歩行者転倒防止のため木の段々が施されている。そこを人々が思い思いの服装で通りかかる様子が描かれ、風景画ながら、町の人々の生活を描いた風俗画に近い作品になっている。

モスクワでは冬は滅多に太陽が顔を出さないが、イエレーツは南に位置するだけに天気の日も多いのであろう。雪景色の中を明るい陽光が降り注ぎ、光の陰影の変化がこの絵をより見応えのあるものにしている。レンガ造りの家々はソリッドな堅牢さがその外観から



図版 26 O. A. アヴァキミヤーン

「イエレーツの冬」(制作 1991 年) 油彩・画布 70 x 90 cm

も感じられ、道行く人々の人物像も巧みに描かれている。イエレーツの町の人々の生活の匂いを感じさせ、かなりの労作と言ってよい。

その画家は九一年春から翌春にかけて、毎月定期的に画廊に作品を出品していた。彼が絵の販売委託をする画廊はレーニン通りかペトロフカの画廊、ないしはオクチャーブリの画廊の三カ所と決まっていて、作品がそのうちのどの画廊に現われるかは予断を許さなかった。私はその頃、その三カ所の画廊は限なく回っていたこともあり、その期間の彼の作品はほとんど目にしているはずであるが、その結果として、九二年春までにこの章で紹介した二点を含め、彼の作品を四点手に入れている。残りの三分の二ほどは、ほかにもっと気に入った絵に出会ったため手に入れることを諦めたか、または作品の出来映えがそれほどでもなかったためにパスした次第である。

ところが、その後ぱったりと半年以上もの間、彼の絵はどの画廊にも出品されなくなり、急病にでもなったのか、それともロシアを棄てて国外にでも移住してしまったのだろうかといろいろ心配していたが、その年の冬も始まろうという頃に、突然オクチャーブリの画廊に彼の大振りの作品が一度に三点も現れ、私に嬉しい驚きをもたらした。と言うのは、それらの作品の出来映えがそれまでの彼の作品から一皮剥けたようにレベルが上がってい

たからである。どこかで真剣な絵の制作に取り組んでいたものらしく、その成果がその三点の作品であったというわけである。

次の作品はその三点の中で特に気に入って、すぐその場で間髪を入れず手に入れたものである。



図版 27 O. A. アヴァキミヤーン

「八月の終わり」(制作 1992 年) 油彩・画布 80 x 120 cm

「八月の終わり」(図版 27) という題名のこの作品は、初秋の夕方近くの景色を池の上から茶系の抑えた色合いを基調にして描いたものである。西に傾く太陽が薄曇りの空に透けて見え、その淡い柔らかな光が景色全体を支配し、陰影に富む美妙な雰囲気を創り出している。構図は池の幅を思い切りよく広々と取り、背後に深い奥行きの遠景と表情のある空を配したスケール豊かなもので、四十号ほどの画面の大きさがありますところなく生かされている。この絵の良さは、何はさておき、水面が質感豊かに表現されていることにあり、その出来映えの素晴らしいがこの絵を生き生きと大変見応えあるものにしている。充分な自然光の中で距離を取って見ると、遠景はさらに遠退いて深々とした奥行きが出て、太陽は光を集めてより自然な輝きとなる。この画家の特徴は茶色を基調とする色彩バランスの取り方があり、作品にもその良さが遺憾なく発揮されている。茶系の哀感を帶びた抑えた色調からは、夏が去り逝くことを惜しむ情感がひしひしと伝わってくる。この絵は、いつも見ていて、少しも見飽きることがなく、私のコレクションの中で最も気に入っている部類の作品と言うことが出来る。

アヴァキミヤーンが画風に新境地を示した頃は、私の駐在期間も残り八か月を割っていて、その時期は最初に出向く画廊が絵画美術センターとだいたい相場が決まっていて、ほかの画廊を隈なく回ることはあまりしなくなっていたので、その後の彼の作品は、残念ながら、駐在を終えるまでほんの数点を見ることが出来たに留まった。

その中の一点は忘れもないが、大変優れた絵であった。四十号ほどの画布を縦長に描いた作品で、画面の下から半分弱の右側前景には止まっている有蓋馬車が茶系の色調でクローズアップして描かれ、その左側の後景には十九世紀と想われる雪景色の街並みが、風に舞って地を這う雪煙の中に寒々と震んで見えている。残りの上半分強の画面には動きのある白い雲に覆われた表情のある空が広々とした高い構図で描かれ、馬車の御者台のそばに寄りかかるように立っている御者とおぼしき男が、雲に透けて見える冬の太陽を見上げている。

なぜそんなにその絵に魅せられたのかと言えば、絵の焦点である雲に覆われた高い構図の空に透けて輝く太陽が白色系の強い色彩で描かれ、その描写の実在感が殊の外素晴らしい、太陽が周囲の動きのある白い雲を透かし照らし、柔らかい萎えた光を地上に投げている様子が、陰影のある余韻をもってリアルに再現されていたからである。

その絵はひどく私の気に入ったものの、肝心の絵の値段の方が一桁違うのではないかと思われるほど高額であった。その値付けは画家や画廊の深い自信の裏付けであり、価値は充分にあったのであるが、値段の前になかなか買い求める決心がつかず、結局その絵を諦めてしまったのである。絵画蒐集の中で良い絵を買わずに悔いが残ったケースは幾度があるが、その絵は中でも最大の後悔を今でも私の心に残している。この画家は、特に新境地を示すようになってからは、仄かな光の美妙な幽玄の世界を再現することを志向していて、それを作品の中で成功裏に表現している。それだけにその後の彼の作品を見たいという思いは強く、将来の活躍が気にかかる画家の一人になっている。

二人目の画家は S・A・ネシームヌイといい、私の友達でもある。彼は絵画美術センターの店内の奥の戸口から通じる中二階の小部屋にアトリエを持ち、時々必要に応じて画廊の方で傷ついた絵の補修をしたり、画廊の地下にあった額縁工場で額縁製作の手伝いをしたりしていたが、普段はそのアトリエで絵を描いていた。

彼が例のヴァレーリ・ドミートリヴィチに紹介されて初めて私の前に立ち現れたのは、展示の絵に私の指摘で傷が見付かり、修理のために奥から呼ばれたためであった。彼はすぐその場で絵の具を調合して難なくその傷を修復したが、その絵の具の色合いの正確さと手際の良さを見ながら、真の絵の修復家はデッサンやいろいろなブラシワークにも通じ、且つ絵の具をどう混ぜ合わせれば必要な色が出せるかといった技術を身に付けている者であるといった、どこかで聞いた話を思い出し、彼のそんな作業に印象付けられたのであった。そのため、その後暫くは絵の修復が彼の職業とばかり思っていたが、やがてヴァレーリ・ドミートリヴィチから「絵を見てやってくれ」と言われて、彼が画家だということを知ったのである。



図版 28 S. A. ネシシームヌイ (1961 年生まれ)
ロシア芸術家同盟会員
「昆布漁師」(制作 1985 年) 油彩・画布 72 x 90 cm

「昆布漁師」(図版 28)は、それから二週間後に彼のアトリエに入り込んで、ほかのもう一点の風景画と共に手に入れた彼の最初の作品であった。絵には白海の沿海で昆布採りをしている様子が描かれている。画面手前のボートに立って、昆布を探って海に棹(さお)さしている男が画家自身であるという。実際にそうした場面を体験し、それを絵に再現したものらしい。画面の奥に向かって横長に等間隔に配置された三隻のボートのそれぞれに、人が一人ずつ立って昆布の採取作業をしている構図はバランス感覚に溢れたものであり、作業の瞬間を捉えた三人の動作には、芸術美にまで高められたひとつのまとまりのあるフォルムが表現されている。動の中に静があり、静の中に動があるといった三人の動作は相互に関連があるかのように描かれ、その顔の表情とあいまって、全体としてどこか能の舞を見ているような不思議な魅力が感じられる。水の透明度を想わせる白い柔らかな海の色合いは、茶系の色調で穏やかな輪郭をもって描かれたそんな彼らの姿を浮き彫りにし、そこが波のない静かな入り江であることを示すと共に、情景を表現する場としての舞台のような効果をも醸し出している。

後に彼とは友達付き合いをするまでになったが、知り合った時、彼はまだ三十歳の若さ

であった。背は高めで、ロシア人にしては少し痩せぎすで、薄い髪に囲まれた口はよく煙草を燻らしていた。物静かで内気な質で、私の好きな素朴なタイプの男であった。作品を売り込もうとか、自己宣伝をしたりすることは全くと言ってよいほどなく、そのため彼がれっきとしたロシア芸術家同盟会員であり、会員になったのは弱冠二十七歳の時であったといったこと等を知ったのは、ずっと後になってからであった(芸術家同盟会員になるには、いろいろな展覧会に出演して、ある程度名前と絵の技量をアピールした後、芸術家同盟に入会申請をし、それからさらに芸術家同盟の指定展覧会に一定期間出品を続けて、資格審査を受けるのである。彼は一九八五年より各種の展覧会への出展活動を続け、八九年に入会を認められた)。

次の作品は、異例の若さで芸術家同盟会員に迎えられたそんな彼の実力を窺わせるに充分な力作である。



図版 29 S. A. ネシシームヌイ

「夕暮、森の湖」(制作 1991 年) 油彩・画布 70 x 80 cm

「夕暮、森の湖」(図版 29)は、対岸に森のある狭い沼か川のようにも見える湖の夕暮の景色を描いたものである。森の梢に明るい夕陽が照っているためにその下の日の当たらない部分は翳りが強調されているが、それは言うまでもなく、自然の理に適った光の処理法で描写されているためである。題名から言うと、翳りの方に絵の焦点があるようであるが、

夕陽の照っている明るい方に先に目が行ってしまうのは仕方がないであろう。その明るい部分はさすがに良く描けていて、木々は立体感があり、何よりもその梢を照らす夕陽の質感や温度感が見事に表現されている。

駐在を終えた年の大晦日に自宅の二階のベランダに出て、この絵の額縁の埃を払つて気付いたことであるが、外気の自然光の日陰の中でこの絵を見た時、夕陽の部分が光を取り込んで、実際本物の夕陽が当たっているように見え、大袈裟な表現をするつもりは少しもないが、そのリアルな暖かい日の感触に思わず暖を取ろうと手をかざしたほどであった。

それだけに翳っている方の景色はくすんで見え、そのため絵全体としてもちょっと見には地味な類の絵なのであるが、翳りの部分もよく見ると、夕陽の当たっている所と同じように立体感をもつて丁寧に描かれ、翳りの中に陰鬱に沈んだ森や湖のひんやりとした佇まいが窺える。木々の影になった部分はその対面にも森があることを示しており、それを考慮に入れて見直すと、この絵の想像上の視界が画面の対面、つまり、鑑賞者の背後にぐつと広がり、自ずと視点が影になった湖の方に移動する。じっくりと鑑賞すると、キャンプでもしながら迫りくる夕暮のひと時を森に囲まれた湖の畔で迎えているような気分に誘われ、この絵を「夕暮、森の湖」と名付けた画家の意図に理解が及ぶのである。光の陰影を表現する意図から、素人目には絵としてあまり見映えのしない部類の難しい景色をわざわざ選んで、その表現に成功した芸術性の高い作品である。

駐在を終えた年の翌年、十月初めから三週間にわたり、かねての約束通りこの画家を日本に招待した。そのうちの四日ほどは伊豆半島から富士五湖にかけて車で案内し、紅葉が始まりかけた日本の美しい秋の景色を彼に紹介したのであるが、彼はその途中度々車を降りて絵になる景色を写真に収めたり、写生したりして、モスクワに戻った後、それをもとに何点かの優れた日本の風景画を制作している。

「山の夕暮(日本)」(図版30)はその中の一点で、この絵に描かれた山は十国峠である。箱根の方角から峠を見渡したもので、画面中央にドライブインが細長く見えている。実は、この作品を制作するに当たり、彼はそのエチュードを実際に現場で描いているが、それは十国峠を伊豆の方向から通過して、少し先の山の中に入り込み、見晴らしのきく所から写生したものであった。午後二時過ぎから描き始め、三、四時間後に日が暮れてしまつたため、そのエチュードには、描く時間の推移を反映して、昼間から夕方に近付く頃の風景が描かれている。「山の夕暮」の方は、その時の体験をもとに、モスクワに戻って印象の褪せないうちに制作したものであるが、時刻はもう少し遅い夕暮時の情景になっている。彼は日本の景色の美しさに感心していたが、その美しさはロシアの景色の美しさとは異なるとも言っていた。その違いについてあえて彼のコメントを求めなかつたのは、今にして思えば残念であった。代りにその美しさの違いについての私の印象を言うとすれば、川や海、紅葉等の自然を彩る色が異なることや光の絶対量が格段に違うということも含めて、ロシアの景色はスケールの雄大さで魅せるのに対し、日本のそれは山等に遮られて見通しがきかない反面、狭い情景を光の強さでディテールまで浮き彫りにして、その美を鮮やかに且



図版 30 S. A. ネシシームヌイ

「山の夕暮(日本)」(制作 1995 年) 油彩・画布 57.5 x 97.5 cm

つ繊細に魅せるということになるであろうか。そのため、ロシアの画家が日本の風景をどう表現するのか大変興味の尽きないところであったが、届いた作品は期待に違わない見事な出来映えであった。

単に日本の風景を描いたというだけのものではなく、仄かな夕暮の微光が山肌の凹凸のある形状を細やかに照らし出し、薄明の中にも変化に富んだその微妙な陰影の表情には、いかにも日本の風景らしい繊細感がにじみ出ている。山々はどっしりした実在感があり、山の秋が黄昏の中で霧囲気豊かに表現され、日本の風景画として少しも違和感のない、見応えのある作品に仕上がっている。彼が日本を訪れたのは短期間であったが、この絵をじっくりと見るにつけ、その経験が彼の絵の技量を高める上で大きなプラスであったことが判る。

「ロシア・クーザフ島(白海)」(図版 31)は、画家が日本の風景画を集中的に制作してから一年ほど後の九六年に描いた作品である。その時期、彼は数年前から毎年夏になると、ひと月あまりもの間、友人と共にそれぞれの家族を連れ立って、友人の組立式ヨットで白海の無人島巡りをするのを恒例としていて、その旅程はモスクワからムルマンスクへ行く途中のキエムという所まで列車で行き、白海に面したそこの港でヨットを組み立てるのだという。九五年には彼自身も組立式ヨットを買い込み、その友人と共に二組のヨットで白海に乗り出している。白海やその海の無人島の大自然の中で一週間も過ごすと、自ずと背筋がぴんと伸びて、生き返ったようになると聞かされた。



図版 31 S. A. ネシシームヌイ
「ロシア・クーゾフ島(白海)」(制作 1996 年)

油彩・画布 50 x 90.5 cm

この作品は、そんな羨ましい限りの九五年の夏休みの体験をもとに、白海の無人島の魅力的な風景を再現したものである。前景に岸辺が見えている島の高い所に画家の視点があり、そこから海を見下ろす格好のパノラマが描かれている。構図上、前景の岸辺の存在は画家の視点と海との間に広い空間があることを明確にさせる効果を担っており、この絵をダイナミックに立体的に表現するのに役立っている。題名の「クーゾフ島(籠島)」は、画面の後景に描かれた島の名称であるが、島の形が伏せた籠のように見えるところからその名がつけられたという。この絵の素晴らしい点は、何と言っても、遠近法で巧みに描かれた景色全体にわたって溢れるような光と透明度の高い空気感が鮮明且つ柔らかな色調でリアルに表現されていることがある。海や中景から後景にわたって描かれた島々の自然の理に適った巧みな光処理の表現は、画家が若くして早くも光を完全に自分のものにしていることを窺わせる。海原に反射する逆光の、目を射るような光の強さはただものの表現ではなく、その色彩には一流画家の証とも言える、ほとばしるような力感がある。海の表面はいかにも光が反射しているという感じが巧みに表現され、また、静かな中にも表情のある海は、深みの方はどうしりとしたマスを感じさせ、浅瀬は浅瀬なりの質感がある。白海の美しい夏の大自然が高い完成度で再現されている。

**ところで、二〇〇八年の夏にモスクワに出掛ける機会があって、そこでネシシームヌイ画家と久し振りに会うため予め電子メールで彼に連絡を入れたのであるが、ついでに本章の彼の作品についてのロシア語訳の解説をメールに添付したところ、彼から返事を受け取った。その関連個所を述べると、それは、

「貴書の抜粋を拝読しました。私の作品についてあなたが書かれた非常に多くの箇所が、その作品で私が伝えようと努めたことに附合しています。以前私たちは絵について詳しい話をすることはありませんでしたが、話合うべきだったと思います。そうすれば、それは私にとって有益で、楽しいものになったことでしょうに」というもので、この私にとっては思いがけないコメントに、大変嬉しい思いをしたのは言うまでもない。

しかし、それをここで紹介するのは、自分の鑑賞眼をひけらかすようで、躊躇もあったのであるが、最終的にそれを敢えて披瀝することにしたのは、私の威信を高めることにもなるそんな彼の言葉が、広範な読者を予定している本書の性格を考えた場合、大変重要な要素として機能し、読者にプラスに作用すると思われるからである。つまり、本書は、絵画の専門家や絵画愛好家のみならず、一般読者も対象にしているので、絵がよく解らないと思っている人にも解るように配慮して書いたつもりである。ところが、実際そのように書かれたものであったとしても、ここで別の問題が介在してくる。それと言うのも、知性と感性は別物であるから、本書の大きな部分を占めている絵の解説については、述べていることがよく理解できたとしても、必ずしもその内容自体が作品解説として適切なものであるかについての読者の判断に結びつくとは限らない。私の絵の見方については、オソーフスキイ画伯が本書の序文で「この本を書いたのは外国人でなく、ロシア人ではないのかという考えが私の脳裏に浮かんだ。それほど独自に情感的に、著者はロシアの画家が自分の画布に感情移入したものを感じ取っている」と述べてくれているのであるが、それに加えて、本書で紹介した別の画家がひとりでも具体的にその解説が本書に掲載の自らの作品の創作意図に肉薄するものであることを証言してくれるなら、それに勝るものはないであろう。なぜなら、絵がよく解らないと感じている読者がその証言を読み知れば、その解説に対する信頼度が増して、内容により注意が向く結果、そこから絵をどう見たらよいかにつきより多くのヒントを得ることができるのでないかとの期待が持てるからである。例えば、今この時点でのこの画家の解説を改めて注意深く読み返せば、その解説で示唆したこの画家の特徴に理解が及ぶであろうと思われる。つまり、彼には描写力もさることながら、素晴らしい構想力があって、それに基づきテーマと描写対象が選ばれて、予め、ないしは描写しながら、どうすればよい結果が生み出せるか綿密に構想していることが解る。それだからこそなおのこと描写力が生きるわけであるが、そういう理解で彼の作品をもう一度見直せば、それだけでも十分深い読みの絵画鑑賞の疑似体験になるであろう。